

文京区立第九中学校 校長室通信 「文京九中 ここにあり」



平成30年度 第8号

平成31年3月19日発行



文京区立第九中学校 校長 小 椋 孝

■ TEL 03-3821-7178 ■ FAX 03-5685-4955

■ HP <http://www.bunkyo-kyo.ed.jp/daikyu-jh/>

大きな節目を迎える3年生の素晴らしき門出をみんなで祝福しましょう

春の足音が間近に 晴れやかに巣立つ109名



朝夕の冷え込みはあるものの、昼間には青空が広がって日差しがたっぷりと降り注ぐ日も増え、桜の木も少しずつ蕾を膨らませています。日本気象協会の発表では、都心の桜は21日（木）に開花、30日（土）に満開となる予想です。写真は、自宅の近くのサクラ（ンボ）の木で、すでに満開の花を咲かせています。

卒業式を明日に控え、春の訪れを間近に感じることができる頃となりました。1年間、最高学年としてけん引してくれた109名の生徒が、晴れやかに九中を巣立っていきます。昨日の「3年生を送る会」では、学習発表会をほうふつさせる合唱を披露してくれ、1・2年生は改めて3年生の凄さを実感していました。前にそびえる壁が大きいほど、やりがいは大きくなります。毎年、先輩たちの姿を目指し切磋琢磨する中で、いつしかそれを乗り越え成長してきた3年生。今年も立派に伝統を引き継ぎ、素晴らしい姿を見せてくれました。

明日の卒業式は、今年度の在校生全員で行う最後の行事です。生徒、教職員、それに保護者、地域の方とともに、109名の卒業生全員が一生の思い出とできる素晴らしい式典を創り上げましょう。

九中の特色！「新聞への意見文」投稿 ～3学期掲載分を紹介します～

本校では、国語の発展的な学習として文章をまとめる力を育成することや若者の意見発表のよい機会として、新聞の投書欄への投稿を勧めています。今年度も行事や学校生活への思い、日頃感じていることなどを投稿し、多くの意見文が新聞各紙に掲載されています。自分自身の考えを明確にして発信することは、自ら考え、判断し、行動する力の基盤となります。短い文章の中に、物事を正しくとらえた上で感じたことや意見を表すことは大人でも大変なことですが、掲載された文は、これらのことをしっかりと自分自身の言葉で表しています。次頁以降に3学期のものを掲載しましたので、ぜひ保護者、地域の皆様にもご一読いただけたらありがたく存じます。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成31年2月4日（月）掲載

今日も私は文房具の虜に

中学生 流石 朋香（14） [2年2組]

100円ショップに行って文房具を見ることが好きだ。買う予定がなくても、ついつい寄ってしまう。特に芯を出さずに書くことができるシャープペンシルや針なしのホチキスなど最新のものは私の心をくすぐる。「前より進化している！」と時代の変化を感じさせるのだ。そこで私は10分以上、時を過ごす。

文房具を手に取り、裏に記された原産国の表示を確認する。「MADE IN JAPAN（日本製）」の文字を見ると、さらに興奮する。こんな便利な物が日本で作られているなんて…。その事実に感動する。

しかし、ほとんどの便利な文房具は外国製だ。貼ることだけを目的にした極細の付箋。無駄な部分がなく素晴らしい。外国は日本と視線が違うのだろうか。どうすれば日本でもこの付箋が作れるのだろうか。

そのような疑問をもつと、もう5分、私をその場から動けなくする。こうして今日も私は文房具の虜になる。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成31年2月18日（月）掲載

便利なものには「穴」がある

中学生 工藤 悠未（14） [2年1組]

近年、「便利」という言葉をよく聞く。典型的な例だと、スマートフォンやコンビニなどが挙げられる。利用しやすくて、今や生活に欠かせない。だが、私たちは便利という言葉に惑わされすぎてはいないか。

災害時などでスマホが使えなくなったら、私たちは何を頼りに生活すべきだろうか。もし電車やバス、乗用車が使えなくなったら、何で移動するだろうか。というように身の回りの便利なものには「穴」がある。

言葉の簡略化や発電のしかたまで、便利なものには必ずデメリットがある。百聞は一見にしかずという言葉は全くその通りで、デメリットがあると言っても、実際に体感したり見たりしないと、おそらくあまり気づかないだろう。

今やグローバル社会と言われるまでにインターネットが発達した。それでも新聞や郵便が必要とされているのは、便利に対しての恐れがあるからかもしれない。

※ 東京新聞「若者の声」 平成31年2月22日（金）掲載

達成感求めて 泳ぎ続けたい

中学生 川島 ゆり（13） [1年2組]

また怒られてしまった。「自分は努力が足りない。もっと速くなりたい！」

私は小さいときから水泳を習っている。練習はとてもきつく、すぐ嫌になってしまう。水の中は息がでなくて苦しいし、同じコースを泳ぎ回っているだけ。何度もやめたいと思った。

しかし、結果が出たときの達成感を知ったらやめられない。練習を積み重ねてきた結果が良い記録として表れたときのうれしさは何回味わってもいいものだ。

ある日の練習でまた怒られ、こう思った。「みんなにできて自分にだけできないなどということがあるわけがない」。あきらめず、これからも練習を積み重ねていこう。もう一度、あの達成感を味わうために。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成31年2月25日（月）掲載

将来見据えた進路選択が重要

中学生 土屋 陽樹（15） [3年3組]

「大学進学も見据えた進路選択をした方がいい」と、ある学校の入試相談で言われた。

正直、高校を決めるときに、大学のことは関係ないと思っていた。しかし、この言葉によって私の考えは変わった。

なぜ、大学のことを今、考えるのか。すぐには理解できなかった。しかし、いろいろな高校に見学に行くうちに、その意味が何となく分かってきた。高校で終わりではないからである。高校の先に大学があり、その先に就職がある。高校も大学もその通過点としてあるのだと思った。高校は3年間。しかし、就職後の人生は数十年もある。高校生活を楽しむことも大切だが、希望する仕事に就き将来を楽しむことは、もっと大切ではなかろうか。だからこそ、高校の先に大学を見据え、その先に、将来を見据えることが重要なのだと思った。

私には、将来の夢がある。その夢をかなえるためにも、より慎重に進路を決めたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成31年3月1日（金）掲載

自ら決断して 人生切り開く

中学生 篠田 高大（15） [3年3組]

高校受験という人生に一度の転機を前に、私は自分の意志の重要性を感じている。どのような進路に進もうがそれは私自身の決断であり、後戻りはできない。

私は願書提出期限ギリギリまで受験する高校を迷っていた。親が勧める学校と自分の志望校がかみ合わなかったからだ。最終的には自分の行きたい学校を受験することに決めた。

進路は、「自己決定」が最も大切だと私は考える。その決定に責任と希望をもつことで良い人生をつくらることができると思っています。

これからも数えきれないほど選択を迫られる場面が訪れると思う。後悔のない人生を送るためにも自分の意志で決断を下し、人生を切り開いていきたい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成31年3月9日（土）掲載

大人になるのが早まる不安

中学生 新 ちひろ（14） [2年1組]

私たちがちょうど18歳になる2020年に、成人年齢が18歳に引き下げられ、「大人」として認められるようになります。

幼いころから自分も早く大人になりたいと思っていましたが、今回の改正によって「大人」になるのが早まり、意外に身近なことになりつつあると感じます。

では、20歳と18歳のたった2歳差で何が違うのでしょうか。年齢が引き下げられたということは、未成年の私が、あこがれの「大人」になる日がどんどん近づいているということです。

大人として、いろいろなことができるようになる半面、何かができなくなることもあるはずです。それは何だろう。それをよく考え、理解するために設けられた時間が、20年という期間だったと思います。

その時間が減ったのであれば、心が子どものまま大人になってしまうのではないかという不安も募ります。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成31年3月11日（月）掲載

もう失敗を重ねないために

中学生 志村 真叶（15） [3年3組]

高校に行きたい。明確にそう思い始めたのは昨年の夏に入ってからだ。それまでは、ただぼんやりと大人になりたかっただけだった。はっきりとした意志ももたないまま日々を怠惰に過ごしていた。

だから勉強は全くと言っていいほどしていない。僕の高校受験は周囲に大きな後れをとって、やっと始まったのだった。

おかげで我慢することが多くなった。しかし時間がたつにつれて学力も周りに追いついていき、余裕が生まれ、やがて自制がきかなくなった。親の目から隠れてゲームや読書に興じた。そして受験に失敗した。

大切なのは、やるべきことをやるべきときにやること。楽しむときは楽しむ。その時々を感じなければならないことを、精いっぱい感じなければならないのだ。

これ以上失敗を重ねないためにも、与えられた時間を懸命に生きていこうと思う。

※ 東京新聞「若者の声」 平成31年3月15日（金）掲載

家事を手伝い 母に楽させる

中学生 中山 茉莉（14） [2年2組]

私の家はシングルマザー家庭だ。小さいときから父がおらず、母が家事をすべてやっていた。

去年、私が中学へ入学したのと同時に、母が仕事を始めた。毎朝、私より早く家を出て、夜は帰ってくるとすぐに夕飯を作ってくれる。忙しい日々にもいつも母は疲れていた。

ある日、私は母の代わりに掃除や洗濯、料理を試みた。母はとても喜んでくれたが、たった1日なのに私は疲れてしまい、こんなに大変なことを母は毎日しているのかと初めて気づいた。それなのに、私はいつもわがままを言っている。

これからは母の家事の量を減らし、楽をしてもらえるように手伝っていこう。そして、ここまで育ててくれたことに感謝して過ごしていこうと思う。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成31年3月18日（月）掲載

けがをしてふと思ったこと

中学生 平野 朱里（13） [1年3組]

私は以前、けがをして足を痛めたことがあった。不自由なことが多く不安でいっぱいだったが、周りのみんなが助けてくれた。そのとき、ふと思った。この世の中には足が不自由で歩けない人や、目に障害があって見るができない人などさまざまな人がいると。

でも私たちは、毎日楽しく過ごしている。その毎日が当たり前だと思っている。障害をもった経験がないから、そう思ってしまう。

けれど毎日病氣と闘っていたり、急なことで昨日までできていたことが突然できなかつたりする人たちが普通にいる。今、この文章を書いている私の手も明日は動かない、なんてことがあるかもしれない。

いつ何が起きるかわからないから、毎日楽しく精いっぱい生きたい。けがをしたときに感じた不安よりもっとつらいことを抱えている人や、何かと闘いながら毎日を過ごしている人がいることを忘れないようにしたい。